

書写の学習は何を目ざすのか



山梨大学教授

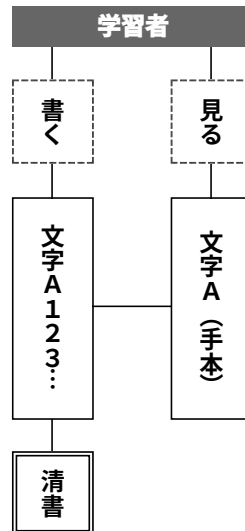
宮澤

正明

書写の学習では、何を目ざすのでしょうか。また、指導者は、児童に何を求めて指導をするのでしょうか。

次の図1は、書写の学習過程の一つを示したものです。いわゆる手本となる文字Aを見て、一枚(A1)、二枚(A2)と書く活動を重ねて手本に迫ろうとするものです。この方法では、たとえ具体的な学習目標が掲げられたとしても、文字A(手本)のすべてを学び取ろうとし、結果的には完成作品(清書)を目ざすことになります。したがって、指導者も完成度の高い清書を求め、その出来不出来が評価の対象になりやすくなります。

図1



書写の学習が目ざすものは、個別の文字の完成度を高めるのではなく、あらゆる文字を正しく整えて書くことができる方法(原理・原則的基準。書写の基礎・基本と考えることもできる。以降「原理・原則」とよぶ)を習得し、社会生活におけるさまざまな書写活動に対応できる書写能力の向上です。言い換えれば、文字を正しく整え、さまざまな書式、形式に適切に書くための普遍的な原理・原則及び技能を習得することにあります。

この理念に基づいて書写の学習過程(筆使いや字形を主とした場合)を考えると次ページの図2のようになるのではないのでしょうか。

結論を先取りしてしまうと、文字を正しく整えて書くための知識(原理・原則)を理解すること、それをふまえてさまざまな文字を書くことで応用力を養うことを目ざすことになります。

まず、文字を正しく整えて書くための原理・原則を文字X(原理・原則が明確な平易な文字。実際に書く文字Aでも可)だ文字B、Cなどを選んで書き、学習成果を確認します。

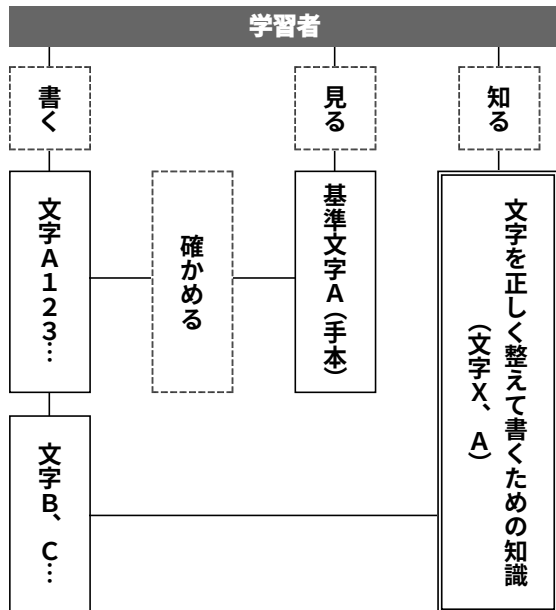
この一連の活動では、知る(理解)、見る(観察)、書く(実験、確かめる(検証)などが循環的に行われ、一つの知識が実践によつて習得され、そして応用・発展にもつながることを示しているといえるでしょう。

そして、評価は知識の理解度、課題の発見・解決の手順・方法、技能の習得度、学習全般にわたる関心・意欲など多岐にわたることになります。評価者にとって、大変そうに見えますが、自己評価、相互評価、学習カードを工夫することですべての評価に対応する必要はないでしょう。要は、児童が知識を理解し、それが応用力につながったかどうかが重要なのだと考えます。

書写の学習は、ややもすると技能面に偏し、思考する場がほとんどないといえます。文字を書く行為は、単純な筋肉運動ではなく、ましてや指先の巧緻性(うご)のみに支えられる行為ではありません。知の総体としての行為にほかなりませんから、あらゆる能力を結集して臨む必要があります。また、そうすることでそれぞれの能力を引き出し向上させることにもつながるでしょう。

今回示した学習過程は一つの例にすぎませんが、書写の学習が目ざすものは何かを明確にしたものとして参考にしていただきたいと思います。書写の授業開発はまだまだ工夫の余地がありそうです。

図2



で知り、次に基準をもつ文字A(手本)を観察して原理・原則を確認したうえで、実際に書いて理解を深めます。文字A一枚目(A1)、二枚目(A2)と、その都度、基準文字Aの原理・原則を確かめつつ書き進めます。その際、課題の発見、課題解決のための工夫や方法が検討されます。また、自己評価、相互評価、教師による支援・助言を通して課題や問題の克服が行われます。最後のまとめは、学習成果の確認として、本学習で扱った文字X、A以外の原理・原則を含ん